

ヨハネによる福音書7章 「分裂する群衆」

1A 内密の都上り 1-13

1B 世の憎しみ 1-9

2B 群衆の小声 10-13

2A 上辺の裁き 14-24

1B 神からの教え 14-19

2B 安息日の割礼 20-24

3A 神から来て、神に行かれる方 25-36

1B 神から来られた方 25-31

2B 神のもとに行かれる方 32-36

4A 「来て、飲みなさい」 37-44

1B 流れ出る生ける水 37-39

2B 応答の分かれ 40-44

5A 律法を知らない張本人 45-53

本文

ヨハネによる福音書7章を開いてください。私たちは再び、エルサレムで行われるユダヤ人の祭りに、イエス様が行かれるところを見ていきます。2章において、過越の祭りの時に宮清めを行われました。5章において、どの祭りが分かりませんが、エルサレムのベテスダの池で男を安息日に癒されました。前回、6章ではガリラヤにて、五千人の給食の奇跡を行われて、人々が王に担ぎ上げようとしたところ、イエス様が真っ向から否定して、本当の意味でご自身を信じるように促したところ、かえって弟子たちがつまずいて、いなくなっていました。

そして7章です。ここでは、ユダヤ人の三大祭りの秋の祭り、仮庵の祭りに主が向かわれるところを見ます。そして、このエルサレムでの滞在は、10章まで続き、10章には冬に行われるハヌカー、宮清めの祭りについて書いてあり、それからエルサレムを離れます。これが、最後の週にエルサレムにろばの子に乗って入城される前の、最後のエルサレム滞在になります。

1A 内密の都上り 1-13

1B 世の憎しみ 1-9

1 その後、イエスはガリラヤを巡り続けられた。ユダヤ人たちがイエスを殺そうとしていたので、ユダヤを巡ろうとはされなかったからである。

イエス様は、前回、エルサレムに上られた、ベテスダの池での奇跡の時から、ずっとガリラヤに留まっておられました。そこで福音を宣べ伝えておられました。その理由の一つが、「ユダヤ人たちがイエ

スを殺そうとしていた」というものです。ベテスダの池で、安息日に人を癒しただけでなく、ご自身を神と一つにされたことに対して怒り、憎しみ、殺意を抱いていました。それで、主はユダヤ地方を巡ろうとはされませんでした。

イエス様は死を恐れているわけでもなんでもありません。これから見ていきますが、「わたしの時はまだ満ちていない」ということです。父なる神が定められた時に、ご自身が世に来られた目的、罪の供え物になるという目的を果たされます。その目的にかなわないことによる死は、かえって御心を損なうことから、避けておられたのです。私たちも、賢く動くべき時が多くあります。私たちは、主のみこころを行うのですが、主は、私たちが無意味に危害を受けるようにはされません。避けなければいけないものは、避けるのです。

2 時に、仮庵の祭りというユダヤ人の祭りが近づいていた。

午前礼拝で説明しました、イスラエルの民の荒野の旅を神がつつがなく守ってくださったことを覚える祭りです。レビ記 23 章に詳しく書かれていて、9 月下旬から 10 月初旬にかけて行われます。秋に実る作物の収穫祭でもあります。荒野の旅が守られ、約束の地に無事に住むことができるようになったことを記念します。それは同時に、神の国が到来する期待もあります。過越の祭りが、イスラエル人がエジプトから解放されたのを覚えるのですが、それは終わりの日にイスラエルの民が諸国の虐げや攻撃から救われることを思う時でした。仮庵の祭りは、無事に神の国の中に入ることができたことを喜ぶものです。

そのため、ユダヤ人に宗教指導者はなおのこと、イエス様を警戒していました。こういった祭りの時に、メシアの到来への強い願望が、ユダヤ人の中に現れます。ですから、イエス様のところに人々が集まるようになって、彼こそがメシアだ、キリストだというのを懼れていたのです。

3 そこで、イエスの兄弟たちがイエスに言った。「ここを去ってユダヤに行きなさい。そうすれば、弟子たちもあなたがしている働きを見ることができます。4 自分で公の場に出ることを願いながら、隠れて事を行う人はいません。このようなことを行うのなら、自分を世に示しなさい。」5 兄弟たちもイエスを信じていなかったのである。

イエス様の「兄弟たち」ですが、正確に言えば「半兄弟」です。イエス様はまだ夫婦の関係を持つ前にマリヤから聖霊によって生まれましたが、彼らはマリヤとヨセフとの間に生まれた弟たちです。一見、イエス様が行なわれていることを認め、イエス様を支持しているような発言をしています。ガリラヤで数多くのわざをイエス様は行なわれていました。けれども、その働きをユダヤ人たちに公式に認めてもらうためにエルサレムに行くべきだ。そしてユダヤ人たちが集まる祭りの時に行くのは絶好のチャンスではないか、という助言です。でも、ヨハネは注釈を入れて、「兄弟たちもイエスを信じていなかったのである。」と言っています。

父は母と共に2003年に信仰を持ちましたが、その前、まだ信じていなかった時、ある牧師が行なった講演ビデオを私に見せてくれました。父は、店を経営している経営者でしたが、経営者向けの講演です。そして父は、「お前もこのように大きなことを目指して頑張りなさい。小さな所でちまちまやらないで、世の中に役立つようなことを行なって活躍しなさい。」つまり、この世で認められるようになりなさいという勧めです。これと同じような感じでイエスの兄弟たちは、ユダヤに行きなさいと勧めたのです。つまり、人間的、世的な思いから、兄であるイエスに対してアドバイスしました。

6 そこで、イエスは彼らに言われた。「わたしの時はまだ来ていません。しかし、あなたがたの時はいつでも用意ができています。7 世はあなたがたを憎むことができないが、わたしのことは憎んでいます。わたしが世について、その行いが悪いことを証しているからです。8 あなたがたは祭りに上って行きなさい。わたしはこの祭りに上って行きません。わたしの時はまだ満ちていないのです。」9 こう言って、イエスはガリラヤにとどまられた。

イエス様は、ここヨハネの福音書の中で、「わたしの時」というのを何度も使っておられます。これは、「わたしがキリストとして公に現われる日」ということです。その日は定められています。ダニエル書9章24節に、「七十週が定められている」とあります。六十九週が来ればメシアが来て、それから彼は断たれる、つまり殺される、とあります。イエス様が、「ホサナ！」という群衆の歓喜の声に囲まれて、メシアとして公にエルサレムに入城し、その五日後、十字架に付けられて殺されます。その時が「わたしの時」です。まだそれは来ていません、と言われます。主は、その時にこそ、神の御心を果たすために、敢えてご自身をユダヤ人たちに、そしてローマにお任せになります。

そして、対照的に「あなたがたの時はいつでも用意ができています。」と言われていますが、これは人気のある預言者イエスの兄弟たちだ、というような意味合いでしょう。人からの栄誉を求める世的な姿です。なので、「世はあなたがたを憎むことができないが、わたしのことは憎んでいます。」と言われていています。主イエスのところに行くとは、自分の闇が照らされて、それでなおかつこの方のところに行くことです。それゆえ、自分のあり方を捨てたくない人はイエスを憎むのです。

2B 群衆の小声 10-13

10 しかし、兄弟たちが祭りに上って行った後で、イエスご自身も、表立ってではなく、いわば内密に上って行かれた。

弟たちには「この祭りに上って行きません」と言われましたが、それは公式に、あなたがたの言うような形で祭りにはいきません、ということでしょう。それで、内密に上って行かれ、いつの間にか人々の中に溶け込んでいた形でエルサレムに行かれました。

11 ユダヤ人たちは祭りの場で、「あの人はどこにいるのか」と言って、イエスを捜していた。12 群衆はイエスについて、小声でいろいろと話をしていた。ある人たちは「良い人だ」と言い、別の人たちは

「違う。群衆を惑わしているのだ」と言っていた。13 しかし、ユダヤ人たちを恐れただけのため、イエスについて公然と語る者はだれもいなかった。

ユダヤ人たちは、かなりピリピリ来ていました。取り締まろうと思っていました。そのことを知っていたので、群衆の声は小さくなっていました。密かに話しています。その内容が、この 7 章全体に流れています。それはイエス様についての意見は、中庸なものではなく、真っ二つに分かれていたということです。「ある人たちは「良い人だ」と言い、別の人たちは「違う。群衆を惑わしているのだ」と言っていた。」とあります。この「良い人」の「良い」は、神が良い方であるという時に使われる「良い」であり、神からの方という意味合いがあります。ところが、もう一方は、「群衆を惑わしているのだ」ということです。このどちらかでしかなかったのです。イエスという方を人が見つめるときに、このように強い意見なしに語ることはできません。主ご自身は神の子なのか、あるいは人々を惑わしている偽預言者なのかの、どちらかでしかないのです。

2A 上辺の裁き 14-24

1B 神からの教え 14-19

14 祭りもすでに半ばになったころ、イエスは宮に上って教え始められた。15 ユダヤ人たちは驚いて言った。「この人は学んだこともないのに、どうして学問があるのか。」

神殿の境内で、外庭にある「ソロモンの廊」というものがあります。そこでラビたちが教えるので、人々が多く集まってきます。そこで主も教えられたのでしょう。そこで半ばですから、祭りの四日目になった時に教え始めました。

「この人は学んだこともないのに」というのは、彼らの考える正規の教育を受けていないのに、ということです。当時は、専門のラビ教育機関があったそうです、いわゆる神学校です。また、独学で学んだ人たちもいます。それから、悪魔から習ったというような言い方もあったそうです。あとで群衆の中から、「あなたは悪霊につかわれている」と言っていますから、そういった疑いをもって驚いているのかもしれない。いかにも自分たちこそが律法を知っていると、それ以外は垂流であり、異端でさえあるという考え方に、私たちは気を付けなければいけません。神学校や、訓練を受けた人々から教えを受けることは有益です、このように害になることもあります。次のイエス様の言葉が大事です。

16 そこで、イエスは彼らに答えられた。「わたしの教えは、わたしのものではなく、わたしを遣わされた方のものです。17 だれでも神のみこころを行おうとするなら、その人には、この教えが神から出たものなのか、わたしが自分から語っているのかが分かります。18 自分から語る人は自分の栄誉を求めます。しかし、自分を遣わされた方の栄誉を求める人は真実で、その人には不正がありません。

イエス様は、決してご自身に栄誉をもたらすことはありませんでした。神の御子として、絶えず父なる神から聞いて、語っておられました。ゆえに、確信もあったのです。その教えは神からのものであり、

それは真実であり、不正がないということを知っておられました。真の知識は、父との関係の中から与えられたのです。私たちキリスト者は、聖霊によって神の養子縁組になりました。ゆえに、聖霊が与えられているので、神から教えていただくことができます。「Iヨハ 2:20 あなたがたは聖なる方からの注ぎの油があるので、みな真理を知っています。」そして、聖霊の働きによって、それぞれが教えを聞く時に、それが神から来ているのかどうか、判別できるというのです。

その反面、ユダヤ人指導者たちの教えていることの根っこには、「自分の栄誉」を求めているところがあります。人からどう思われているのか、自分はそれだけの教育を受けているのかどうか、そうやって人間からの認知を求めています。

19 モーセはあなたがたに律法を与えたではありませんか。それなのに、あなたがたはだれも律法を守っていません。あなたがたは、なぜわたしを殺そうとするのですか。」

モーセの律法には、「殺してはならない」がありますね。今、彼らの中に殺そうと思っている者たちがいたのです。これは明らかに、神の律法に違反することです。

2B 安息日の割礼 20-24

20 群衆は答えた。「あなたは悪霊につかれている。だれがあなたを殺そうとしているのか。」

先ほど言ったように、自分たちの理解を超え、また自分が受け入れられない言葉を教師が言ったとしたら、こうやって「悪霊につかれている」と罵られました。バプテスマのヨハネも、食べも飲みもしなかったら、「悪霊につかれている」と言われましたね。私たちはしばしば、自分自身が分からないからということで、不安になって、自分を守るために、サタンのせいになります。

ところで、ここでは群衆といっても、いろいろな人々が入り混じっています。エルサレムに住む一般の人々がいました。そして巡礼者たちがいて、イエス様と同じガリラヤから来た人たちもいたことでしょう。それから、宗教指導者たちも紛れ込んでいたことでしょう。エルサレムの住民たちは、ユダヤ人指導者がイエス様を捜していることを知っていましたが、ガリラヤからなどの巡礼者は、知る由もなかったのです。ですから、誰が殺そうとしているのか？と訳が分からないと思ったのです。

21 イエスは彼らに答えられた。「わたしが一つのわざを行い、それで、あなたがたはみな驚いています。22 モーセはあなたがたに割礼を与えました。それはモーセからではなく、父祖たちから始まったことです。そして、あなたがたは安息日にも人に割礼を施しています。23 モーセの律法を破らないようにと、人は安息日にも割礼を受けるのに、わたしが安息日に人の全身を健やかにしたということで、あなたがたはわたしに腹を立てるのですか。」

イエス様が言われている「わざ」とは、ベテスダの池における御業のことです。足なえだった男が

「床を担いだ」という行為を、「荷物を運んではならない」という安息日の掟を破った、と憤慨しています。それでイエス様は、彼らの律法解釈がいかにも矛盾しているかを指摘されました。律法の中に生後八日目の男の子の赤ちゃんに、割礼を施しなさいという命令があります。モーセの前に、既に神はアブラハムに対して割礼の命令を行なっていました。けれども、ちょうど八日目が安息日に当たる時もちろん沢山あるわけです。その時、彼らは割礼を施すという、いわば「仕事」を行なっているのです。彼らの解釈する安息日の掟を破りながら、他のモーセの律法を守ろうとしている矛盾です。そして包皮を切り取るという行為が許されているのであれば、なおさらのこと、人を健やかにすることがなぜ安息日違反なのか？ということです。

24 うわべで人をさばかないで、正しいさばきを行いなさい。」

ここが大きな問題でした。7章において、イエス様について否定する意見が出てきますが、それら一つ一つが、情報がすべて与えられていないのに、早まって判断しているものばかりです。キリスト者としても、そのそしりから免れません。「箴 18:17 最初に訴える者は、相手が来て彼を調べるまでは、正しく見える。」とあります。だから、二人、三人の証人がいて、初めて事実を確認されるという律法もあります。それをニコデモが後で言及します。そして、御言葉に対する取り組みにも、正しい裁きではなく、上辺だけになっているのです。今、話した、安息日に対する取り扱いも、矛盾しているのは、上辺だけの判断をしているからです。しかし、そういった裁きを、神学校というか、学問があるかないか、ということで、いかにも聖書知識を持っているかのように見える人が行います。私たちキリスト者として、早まった裁きをしてはいけないという戒めをしっかり受け止めるべきです。「I コリ 4:5 ですから、主が来られるまでは、何についても先走ってさばいてはいけません。主は、闇に隠れたことも明るみに出し、心の中のはかりごと明らかにされます。そのときに、神からそれぞれの人に称賛が与えられるのです。」

3A 神から来て、神に行かれる方 25-36

1B 神から来られた方 25-31

25 さて、エルサレムのある人たちは、こう言い始めた。「この人は、彼らが殺そうとしている人ではないか。26 見なさい。この人は公然と語っているのに、彼らはこの人に何も言わない。もしかしたら議員たちは、この人がキリストであると、本当に認めたのではないか。27 しかし、私たちはこの人がどこから来たのか知っている。キリストが来られるときには、どこから来るのかだれも知らないはずだ。」

エルサレムにいる人々の一部は、ユダヤ人指導者がイエス様を殺そうと意図していることを知っていました。そして、それでもイエス様が捕らえられずに御言葉を語っておられることを、とても不思議に思っていました。それはもちろん、神ご自身の守りがあるからです。神は、ご自身のために働かれる者たちを守ってくださいます。

そのような、主の守りを見ているのにも関わらず、彼らはイエス様を信じませんでした。なぜなら、

出自を知っているからだということです。「しかし、私たちはこの人がどこから来たのか知っている。」と言っています。ナザレ出身であることを彼らは知っていました。けれども、「キリストが来られるときには、どこから来るのかだれも知らないはずだ」というのです。当時のユダヤ教の教えの中で、メシアはどこからともなくやってくるという教えがあったのです。

人間として知ってきた人が、神のキリストであるということは受け入れがたいことだったのでしょ。だから、しっかりとキリストはユダヤ人の間から出てきて、しかもベツレヘムの町から出てくるのが預言されているのに、それでも、どこからともなくやってくると教えていたのです。キリストは人になってこられて、人々の間に住まわれました。私たちは、御霊によって新しく生まれることによって、人でありながら、神につながっている者となっています。したがって、同じようなそりを受けるでしょう。新しく造られた自分ではなく、いつまでも古い自分を見続けられるジレンマです。

28 イエスは宮で教えていたとき、大きな声で言われた。「あなたがたはわたしを知っており、わたしがどこから来たかも知っています。しかし、わたしは自分で来たものではありません。わたしを遣わされた方は真実です。その方を、あなたがたは知りません。29 わたしはその方を知っています。なぜなら、わたしはその方から出たのであり、その方がわたしを遣わされたからです。」30 そこで人々はイエスを捕らえようとしたが、だれもイエスに手をかける者はいなかった。イエスの時がまだ来ていなかったからである。

イエス様は皮肉を込めて叫ばれています、「あなたがたはわたしを知っています。」と。確かにナザレ出身であることを知っている、と。けれども、「わたしは神を知っていて、あなたがたは知らない。わたしは神から来た者である。」とはっきりと言われました。人間にしか過ぎないと思っていた者は、イエス様が神から遣わされたと言ったので腹を立て、イエスをユダヤ当局に引き渡そうとしました。けれども、まだ「イエスの時」が来ていなかった、とあります。先ほどお話した、イエス様が公にキリストとしてエルサレムに入られる時のことです。神が再び、イエス様を守っておられ、その使命を最後まで全うできるようにされています。

31 群衆のうちにはイエスを信じる人が多くいて、「キリストが来られるとき、この方がなされたよりも多くのしるしを行うだろうか」と言い合った。

ついに、イエス様のなされるしるしと、その教えに感銘を受け、この方がキリストでなければ、誰なのか？というところにまで至ります。

2B 神のもとに行かれる方 32-36

32 パリサイ人たちは、群衆がイエスについて、このようなことを小声で話しているのを耳にした。それで祭司長たちとパリサイ人たちは、イエスを捕らえようとして下役たちを遣わした。

群衆がイエス様に心が引き寄せられているのを見て、パリサイ人たちにとっては困った事態になってしまいました。それで、下役たちを遣わします。レビ人の守衛です。

33 そこで、イエスは言われた。「もう少しの間、わたしはあなたがたとともにいて、それから、わたしを遣わされた方のもとに行きます。34 あなたがたはわたしを捜しますが、見つかることはありません。わたしがいるところに来ることはできません。」35 すると、ユダヤ人たちは互いに言った。「私たちには見つからないとは、あの人はどこへ行くつもりなのか。まさか、ギリシア人の中に離散している人々のところに行って、ギリシア人を教えるつもりではあるまい。36 『あなたがたはわたしを捜しますが、見つかることはありません。わたしがいるところに来ることはできません』とあの人が言ったこのことばは、どういう意味だろうか。」

イエス様は神から遣わされました。神がおられる天から遣わされて、それで今、地上におられます。けれども、間もなく天に戻ることになる、とされています。使徒ヨハネは、イエス様が神から来られた方であることを強調されているだけでなく、神のもとに行くことも強調しています。十字架につけられ、甦られて、それから昇天して、栄光の中に入れられることを強調しています。この方が確かに、天からの方であること、天に属する方であることを教えています。キリストによって、神から生まれた者も同じです。死んで、そして甦ります。キリストが天から来られる時によみがえり、そして天で主と会います。

けれどもパリサイ人のユダヤ人宗教指導者らは、その天の中に入ることはできない、ということでした。彼らはこの意味が全然分かりませんでした。物理的に考えていました。ギリシア人のところに晦ますのか？と思ったのです。けれどもこれもある意味、その通りになりました。イエス様の使徒たちが異邦人の所に言って、ユダヤ教会堂で教え、異邦人にも福音を宣べ伝えました。

4A 「来て、飲みなさい」 37-44

1B 流れ出る生ける水 37-39

37 さて、祭りの終わりの大なる日に、イエスは立ち上がり、大きな声で言われた。「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。38 わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになります。」39 イエスは、ご自分を信じる者が受けることになる御霊について、こう言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊はまだ下っていなかったのである。

主が四日目にエルサレムに来て、今は八日目です。午前礼拝でお話したように、今、イエス様は立ち上がって、招きを行っています。伝道集会などで、主イエスのところに来たい人は、今、来てください、という呼びかけがあります。まさにそれです、イエス様は、ご自身に来るように呼びかけました。

そして、それは、仮庵の祭りの大なる日にいのちを与えるものでした。仮庵の祭りは、まさに終わ

りの日に、荒野に川が流れて、主の霊が降り注がれる時です。それが、今、イエス様を信じ、受け入れることによって、腹から御霊の命が流れ出るということです。それは鉄砲水のように、罪による裁きによって乾ききった地に、主がその地を癒し、豊かな水を勢いよく流すことであります。その救いに喜ぶのが仮庵の祭りの極意です。その終わりの日の幻を、イエスを信じることによって自分の内で前もって味わうことができるということです。

2B 応答の分かれ 40-44

40 このことばを聞いて、群衆の中には、「この方は、確かにあの預言者だ」と言う人たちがいた。41 別の人たちは「この方はキリストだ」と言った。しかし、このように言う人たちもいた。「キリストはガリラヤから出るだろうか。42 キリストはダビデの子孫から、ダビデがいた村、ベツレヘムから出ると、聖書は言っているではないか。」

主が、渴いている者はわたしのところに来なさい、と言われた呼びかけで、本当に多くの人が、キリストだと言って、そうでなくとも「あの預言者」と言いました。モーセの後にモーセのような預言者が現れるという約束です。このように受け入れていくのに、やはり、必ず心を頑なに拒む人たちが出てきます。イエス様がベツレヘム生まれなのに、そのことを知らず、ガリラヤ生まれだと思い込んで、彼はキリストではないというのです。正しい聖書知識はありましたが、正しい情報を持っていなかったのです。これも悲劇的なことです、よく起こります。聖書は正しく理解しているはずが、実際のことを知らないで誤った判断をしているのです。

43 こうして、イエスのことで群衆の間に分裂が生じた。44 彼らの中にはイエスを捕らえたいと思う人たちもいたが、だれもイエスに手をかける者はいなかった。

群衆の中での分裂です。イエス様によって、人々は一つに集められるはずのところ、かえって分裂してしまいました。これはイエス様のせいではなく、人の罪、人の頑なさのゆえです。キリストを受け入れた者には、キリストに従う者には一致が与えられます。しかし、その中で拒む者たちがいるので、イエス様の働きが進んでいくと、かえって分裂のようになってしまうこともあるのです。

ヨハネは第一の手紙を、分裂を引き起こす者たちがいることを念頭に書いています。グノーシス主義者らがいて、自分たちは知識を持っていて、だから神に近いというような考えを持っていました。それで教会の人々から離れて行きます。このようにヨハネは言いました、「Iヨハ2:19 彼らは私たちの中から出て行きましたが、もともと私たちの仲間ではなかったのです。もし仲間であったなら、私たちのもとに、とどまっていたでしょう。しかし、出て行ったのは、彼らがみな私たちの仲間でなかったことが明らかにされるためだったのです。」

そしてついに、イエス様に手をかけることができませんでした。

5A 律法を知らない張本人 45-53

45 さて、祭司長たちとパリサイ人たちは、下役たちが自分たちのところに戻って来たとき、彼らに言った。「なぜあの人を連れて来なかったのか。」46 下役たちは答えた。「これまで、あの人のように話した人はいませんでした。」47 そこで、パリサイ人たちは答えた。「おまえたちまで惑わされているのか。48 議員やパリサイ人の中で、だれかイエスを信じた者がいたか。49 それにしても、律法を知らないこの群衆はのろわれている。」

先に遣わされた下役たちが戻ってきました。彼らもすでに、イエス様の言葉に心を動かされていました。そしてパリサイ人の高ぶりがここに書かれています。「律法を知らないこの群衆はのろわれている」とあります。そして、惑わされているのだと、先ほどの悪霊のせいになっている立場をとっています。彼らこそが、見えていませんでした。「議員やパリサイ人の中で、だれかイエスを信じた者がいたか。」と言っていますが、次にニコデモが出てくるのです。あの 3 章でイエス様のところに来たパリサイ人で、議員です。

50 彼らのうちの一人で、イエスのもとに来たことのあるニコデモが彼らに言った。51 「私たちの律法は、まず本人から話を聞き、その人が何をしているのかを知ったうえでなければ、さばくことをしないのではないか。」

申命記 17 章 6 節にある律法です、「二人の証人または三人の証人の証言によって、死刑に処さなければならぬ。一人の証言で死刑に処してはならない。」

52 彼らはニコデモに答えて言った。「あなたもガリラヤの出なのか。よく調べなさい。ガリラヤから預言者は起こらないことが分かるだろう。」53 「人々はそれぞれ家に帰って行った。」

ここでも彼らは、過ちを犯しています。ガリラヤ出身に対する偏見がありますね。イザヤ書 9 章に、メシアはガリラヤから出てくることが預言されているのです。「9:1-2 しかし、苦しみのあったところに闇がなくなる。先にはゼブルンの地とナフタリの地は辱めを受けたが、後には海沿いの道、ヨルダンの川向こう、異邦の民のガリラヤは栄誉を受ける。闇の中を歩んでいた民は大きな光を見る。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が輝く。」

いかがでしょうか？ことごとく、自分たちが上辺で裁き、自分たちの判断力自体が曇らされているのです。イエスのところに来なさいという、その単純な呼びかけに応えない結果は、暗闇なのです。多くの方が、自分は知っていると思っています。けれども、実は自分は知っていると思っている専門的な分野にまで知らないのです。わたしのところに来なさい、そして水を飲みなさい、そして命を得なさい、この呼びかけに応えたいと思います。